
彼女へ送る・澄んだ空・夢のなか

咲季

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼女へ送る・澄んだ空・夢のなか

【Nコード】

N8070A

【作者名】

咲季

【あらすじ】

田舎とも言えない。都会とも言えない。そんなどこにでもあるような土地に住むある女子高生の話。私立高校に通う荒山優香は一年生。適当に友達と付き合えて適当に恋もできる。勉強もそこそこのきて親も普通のサラリー。ただひとつ彼女が周りと違うことがある。それは彼女に恋をしてしまったこと。そんな澄んだキモチを抱く青春ラブストーリーです。

プロローグ

今日も君の声を探す

今日も君の影を探す

今日も君の夢を見る

いつものバスに乗る君をいつまで見ることが出来るだろうか

そう。いつまで私の視界に君は居続けてくれるのかな？

ただ確かなのはずっとこのキモチは燃え続けるということ

ただ確かなのはこのキモチは誰にも言うことなくただ私の中で燃え続けるということ

それしか掴めるものは無くてそれすら絶対とはいえない
そんな弱い私が居る

だから空の澄んだ色に惹かれるの。

プロローグ（後書き）

まだまだ稚拙な文です。

頑張ります。

意見など是非聞かせてください！

言っちゃえば私も同性愛的なものをもっているのです。そこらへんリアルを書きたいと思います。

朝・汗・しろ

汗の匂いが染み付いてとれない。

今朝も目いっぱい走ったから、だって彼女が乗っていたんだ。いつもより早いバスで、田んぼの中を走る、そのバスに。

「優香ー！！！」

暑い日差しと蝉のやかましい声に白昼夢を描いていたそのとき、私を我に返す声がした。

朝の下駄箱の喧騒と言ったら、その声の主を探すのに一瞬とまどった。

どうやら声の方からして少し行ったところの廊下にいるらしかった。

「朝会うなんてめずらしいね！いつも時間違うのに！！」

朝からテンションの高いこの声、同じクラスの秋山千里だ。

小柄な彼女と教室へと自然に歩きだした。

こんな暑い日には彼女の白い肌が映える。

「暑いからさ、ちょっと早いバスで来たんだよ」

なんて親父くさいこと言えないからとつさの言い訳をした。

「そつかぁ。もう7月だもんねー！あと夏休みまで何日かなあ？」

なんて彼女のハニカミ笑顔が私は好きだ。

朝から千里に会えるし、彼女にも会えた。

なんだか良い日になりそうだ、とそう安易に思う。

1・Bの教室に入るとすでに効き過ぎているエアコンの冷気が汗で湿ったシャツを冷やした。

「うお、寒っ！」

「おはよー」
「はよー」

いつもの朝の風景だ。

今日は千里とだったから前から入ってしまった。

私は後ろへと鞆を持ち上げながら、行く。

一番後ろの席へと行くと鞆を置いた。

後ろというのはこれだから不便だ。

前から入ると苦労する。

でもそれなりに良いところもある。私の席は窓際なので良い風が吹くし。。

それにこの席からだと言われれば彼女は斜め前の前なのだ。

…微妙な位置で話しかけられる位置でないけど。

それでも彼女の後姿を見るだけで胸が苦しくなって何も耳に入らなくてずっと見ていたくて。

こんな私をおかしいと思うかな？

でも良いんだよ。誰にも言うこともないから。

このキモチがあるだけで、幸せだよ。

なんて想う。

…それにしても遅い。彼女が何時までたってもその席に居ないのだ。
教室を見回しても居ない。

朝同じバスに乗っていたし、同じバス停で降りた。

けどその後はさすがに後を追わなかった。

ガララ・

「出席をとるぞー」

野太い声と野太いからだ、担任の藤堂だ。

「ん??今日は佐々木は休みか?」

…とうとう来なかった。

何処で何をしているんだろう…。

「烏丸、御前何かきいてるか?」

担任って誰かが休みだったり遅刻だったりすると必ず仲の良いと思われる人物に話を聞こうとする。

烏丸雄大、神田りさの幼馴染。

「えー何も聞いてないですよ。」

だるそうに答える烏丸、二人は付き合つてるとか噂されてるけど本当なのか?定かでない。

「そうか。まあたまにはこういう日もあるだろう」

ギシギシと苦しそうに呼吸する藤堂が発した言葉、なんて無責任なんだろう。

しかしこういう奴なのだ。

だからあまり好きでない。藤堂。少しは心配しろよ…。

「…荒山???」

「へ??」

いきなり声を掛けられたからかなりびびった。

烏丸だ。奴は私の隣だったりする。

「いや、なんか怖いオーラだしてたから。」

…顔にでるタイプなのかもしれない。

「なんでもないよー!」

「そう?」

じゃあ授業を始めるぞー

て話し終わりかよ!!!!!!!!!!!!!!!!????????

教室には藤堂の息苦しい声と教科書を出すパタパタという音だけが響く。

「今日は67ページからだな」

「古文の予習ノート今日提出だぞー?」

・なんて・

もうみんなの頭にはヤベヨシユウナンテシテナイ!!

・なんて・

ことしか無いんだろう。

その点私はちゃんとやっているんで余裕だけど。

∴それよりも・・・なんで神田りさは休みなのか・・・。
それしか頭に無かった。

時間の過ぎるのがやけに遅くて。
早く日が傾かないかな。
凄く息苦しいや。

朝・汗・しろ（後書き）

長い。。。

存在・嘘

蝉の声は衰える事を知らなかった。

三時間目の始まりのチャイムとともに皆が席をつく瞬間だけ、蝉の
声は掻き消された。

ガンガンに冷えたこの教室に蝉の声は不似合いだった。

いつもと変わらない風景。

しかし今日は彼女が居ない。

「じゃあこの問題、宝さん、解いてみて」

カツッ、カツ、

チョークが削れる音がする。

そして横で顔を覆い隠すようにうつぶせになっている烏丸の寝息が
聞こえる。

…こいつの気持ちよさそうな寝息がこのときだけは私のイライラを
増幅させている事に当の本人は気づくわけではない。

カツッ、カツ、、、

音が止まる。

「…」

沈黙が漂う、解けないなら早くそういいなよ。

何かを聞いていないと、今の私は平静を保てない。

「…」

チッ、

軽い舌打ちの後私はゆっくり椅子を引いた。

その私の行動に反応するように烏丸はむっくりと起きた。

「先生、保健室行っていていいですか？」

皆が一斉に私を見た。

「あら？どうしたの？荒山さん」

「あの・・・」

しまった。言い訳を考えていない。

「お腹が、痛くて・・・」

軽く先生が右眉を吊り上げた。

「…分かったわ。行つてらっしゃい」

「…ありがとうございます」

あまりにも言い訳がベタだったかな。

それでも烏丸は心配そうな目でこちらをみていた。

鞆を右手に提げていることに不審を微塵も感じていない目だった。

「荒山大丈夫か？一緒に行つてやろうか？」

どうやら本気で心配してるらしい。しかし今の私には悪いけど疎ましい。

顔に似合わずいいやつ。ああいう男に女は弱いんだろうな。

「ありがとう。でも大丈夫だから」

何かから逃げるように急いで、足を潜めて教室を後にした。

扉を開ける音がやけに大きく感じた。

廊下には私の足音だけが響いて、

靴を落とす瞬間に妙な寂しさを覚えて、

雨も降りそうに無い空を認めた、

お腹が痛いなんてホラをよく吹いたな自分。

だって仕方ないじゃん。神田りさが居ないんだから、勉強どころじやなかった。

そう、私は誰も知らないうちに彼女に支配されている。

今、このコンクリートを蹴っている瞬間も

今、昼下がりの商店街の主婦たちを横目に見ている瞬間も

今、コロッケの上げたてのにおいを感じている瞬間も

何処かに彼女の姿がちらつく。

ブーンブーン

スカートのポケットに突っ込んでいた携帯がなった。

クラスの女子から心配のメールだ…。

返信するのが疎ましくて時間を確認して携帯をまたポケットに突っ込んだ。

鞆の重さの大部分を占めているお弁当を処理するために私は近くの川原に行くことにした。

12時なんて真昼に帰宅したら母が五月蠅く言うだろうから、家には帰れなかった。

「神田りさはどこに居るんだろう」

川原に向かう今ですらその想いがちらついていた。

夢・川

太陽が人間の真上を光る真昼の日に制服を着た女子高生が一人川原でお弁当だなんて、
なんだか滑稽だななんて思う。

この時間帯は暑すぎて誰も川原に居なかった。

川の流れは穏やかで、キラキラと光る水面があった。

土手から下に降りるとき、草の匂いが激しくした。

少しジメジメしたそこで、一際土の匂いがたった。

少し急な斜面を足をブレーキにして降りる。

ちようどいい感じの草の生えていないところにきたのでそこで鞆をおろした。

こちらへんがちようど木があつて陰になっていて、お弁当を食べるのにちようどいい気がした。

「う・う・うん」

ビクッと自分の肩が上がったのが分かった。

誰も居ないと思った木の陰に既に先客が居たようだ・・。

でもこんな時間に木の下で昼寝なんて、ろくな人間で無いと思った・・。

浮浪者か??ヤンキーか??

その先客はぬつと起き上がった。

それとともにあらわになったその姿に私は驚いた。

つていうか・・

その身にまとっている制服

同じ高校の生徒って事に驚いたし

声から分かる若い女の声ってことにも驚いていた。

それに加えて・・ずっと私の頭の中に居たから頭がおかしくなって錯

覚を見たのかと思った。

だってまさか万に一も会えると思っていなかったから…。

「うー・・・？荒山さん？？」

その寝ぼけた声は私が求めていたもので。

「なんで此処に居るの？？」

その顔は私が求めていたもので。

神様のイタズラ　だとか信じないけどもそれだと少し思った。

「いや・・・神田さんこそ・・・なんで？？」

そう、そこにいたのは紛れもなく学校に何故か来ていなかった神田りさだった。

太陽・寝息

「わたしは・・・ただの昼寝だよ」

そうとぼけた顔で彼女は言った。

そのはにかんだ笑顔が、水面の光を浴びてキラキラと光っていた。

「荒山さんは？」

そうやって普通の会話をしていることが信じられなかった。

「わたしは・・・ただのサボリ」

「ははははは。荒山さんでもサボることあるんだね」

「そんなにわたし真面目そう？」

ヤバイ、嬉しすぎて顔の筋肉が緩みまくっている…。

きつとひどい顔してる。

「うん。たぶん」

そのたぶんって言葉に少し引っかかりを感じたけど仕方ないことだった。

だって彼女とこんな風に二人で話すのは初めてだったから。

「そうかな？」

少しの沈黙が流れる。

此处は静かで、時の流れが遅く感じる。

それでいて暑さを感じるのだから、夏って嫌い。

彼女の頬に一筋の汗が流れた。

それに見とれているちよつと変態的な自分に気づきながらきづかないふりをしてた。

ふいつと私の視線に気づいた彼女がこっちを向いた。

「・・・なに？」

「いや・・・なんでも」

なんでも ってなんだよ・・・。

下手な言い訳もできない自分の脳みそを憎んだ。

さっきの穏やかな沈黙とはまた別のそれが流れた。

それに耐え切れずに何か声を発しようとしてでたのが

「そういえばさ・・今日なんで学校来なかったの？」

これだった。

遠くを見つめるその瞳は何にも動じることなく一点を見つめていた。

「・・・私さ」

「え？」

自分でも驚くほど早く反応した。

「此处で見る夕日好きなんだよね」

ふとそちらをみると何も夕日上がりそうな風は無かった。

それでいて澄んだ空の色が彼女のみつめるものだと思うことも出来なかった。

「わたしは空・好きだよ」

無意識にそういったのは何故だろう。

口が勝手に動いた。

「・・・わたしも好き」

ドキっとした。

これぞ妄想族・・。

でも彼女が同意してくれたことが、何だか共有を許されたようでこそばかった。

ゆらゆらとゆらめく大きな木の葉を、横に。

少し傾いた太陽を上。

ボーッとしているとドサツという音がした。

彼女が横になったのだ。

学生鞆を枕に、まぶしいのか手のひらを太陽にかざして。

「ねえ。寝ても良い？」

何故そう聴くのか理解出来なかった。

でもなんとなく許可しない理由もないので、いいよ、とただそれだけ言った。

するとすぐに寝息が聞こえた。きつと疲れていたんだろう。

口数も少なく、眠る彼女は幼児のように可愛い顔で眠ってた。

ただわたしはその寝顔を見つめていたんだ。

自分の心臓の音が漏れないか、それだけを不安に思い、貴女と居る幸せを感じている。

さりげなく無視された質問の答えがやはり気になった。

それでも気にしないふりをするのはわたしが弱いから。

それだけのこと。

機械的に動く自分の脚を見つめて歩くのだけど、横断歩道の信号がちょうど赤になって止まった。

横に居る貴女の瞳はやはり一点をじつと見つめていて、それを追うように見上げた空にずっしりとゆらめくその赤は信号の赤よりも、リアルに感じられた。

太陽・寝息（後書き）

いやゝなかなかサボらずに書いてますねゝ・アセ

誰か読んでるのか？ワラ

良ければ感想クダサイね！！

体験談（？）なども聞かせてくれたらありがたいですw

夕日・夕暮れ

彼女はグッスリ1時間睡眠をした。

「うつそ！？そんなに寝てた！？」

「ホントホント！！ほらもうこんな時間！」

時計の針は5時をさしてとつくに暑さも弾いていて夏虫の音が響き始めていた。

「あゝなんかつき合わせちゃってごめんね」

「いいよ！わたしも暇だったんだから！」

さつきより肌が少し焼けていた彼女は眠そうにあくびをしてすつくと立ち上がった。

「帰ろっか」

すつきりお目覚めなのか、あくびの力なのか、腹から声が出ていた。

「うん」

夕暮れのなかわたしたちは歩き出した。

「…ねえ」

「え？」

「明日は学校くるよね？」

密かで、一番聞きたかったことを率直に聞いた。

少し戸惑ったような顔をした瞬間、何だか罪悪感のようなチクチクしたものが走った。

聞こえていた夏虫の声も、川原をぬけて草原が無くなって少しずつコンクリートの地面になって、車が走るようになると車の騒音のせいなのか、それともそれ自体が居なくなったのかわからないけど、全く聞こえなくなっていた。

そんなことを考えながらコンクリートの地面に続く一本道をずっと歩いていると彼女がこちらを向いた。

「・・・うん。もちろん」

そう言つてエクボができて、少し安心した。

「そっか・良かった」

本当の気持ち、ごまかさずに言つた。

「荒川さんってさ・・・優しいね」

「え？そ・そう？」

「うん。そう」

ありがとう、そう言つと彼女は不思議そうな顔をした。

あつたかそんな彼女に触れることはなかったけれど、並んで歩いているんだね。

自分の心臓の音が漏れないか、それだけをただ不安に思い、貴女と居る幸せを感じている。

さりげなく無視された質問の答えがやはり気になった。

それでも気にしないふりをするのはわたしが弱いから。

それだけのこと。

機械的に動く自分の脚を見つめて歩くのだけど、横断歩道の信号がちょうど赤になって止まった。

横に居る貴女の瞳はやはり一点をじっと見つめていて、それを追うように見上げた空にずっしりとゆらめくその赤は信号の赤よりも、リアルに感じられた。

夕日・夕暮れ（後書き）

ヤバイです・今・ヤバイです

黙れってね・ワラ

読んでいただきありがとうございます・

眠・欲

現実世界に居るってことは理解していて、それでいて夢を見ているのかがハッキリしない時がある。

そういう時は決まって眠いとき。

眠りの世界へと引き込まれるその一瞬。

私のカラダは、階段を踏み外したような、床の底が抜けたような、そんな感覚をときたま感じる。

そんな時、カラダはビクツと一瞬痙攣し、時には声が出る。

そんな現象。よりによって授業中に起こるなんてね。

その日は効きすぎた冷房に体を冷やしたせいかやけに日差しがいい感じにあったかくて、ついついウトウトしてしまった。

ああ、寝そう。隣の席の烏丸の視線が少し気になるけど少しぐらい寝ても構わない、そんな気の緩み。

それが命取りになった。

ガクツつと体が下に沈む感覚に襲われて驚きのあまり「あっ!!」

と声を起こしてしまったのだ。

それに加え体制を整えようと体に力が入ったため、思わず立ち上がってしまった……。

「荒川さん？」

シーンとした教室に冷やかな先生の声が聞こえた。

クラス中の視線が黒板の前に立つ女教師から私に移る。

この感覚。前にサボリをしたときより痛いのは気のせいでは無い。
「荒川さん？どうしたんですか？」

烏丸が自分のことの様に緊張した顔つきでこちらを見ている。

千里は退屈な授業が中断して少し嬉しそう。

神田りさはただ私をじっと見ている。

クラスのみなも私の発言に注目をしている。

この状況で上手い言い訳を思いつくことのできない自分を憎みこつ
いうことにする。

「寝てました」

クラス中にワツと笑いが溢れる。

バカ正直に言うとは思っていなかったんだろう。

恥ずかしさでいっぱい誰の顔を見るわけでもないのに、ただ斜め
前の時計を見上げてた。

あと少しで授業は終わる。

「静かに!!」

先生の一言で教室はシーンと静まりかえった。

そしてクラス中をにらみつけたあと標的はもちろんこちらに移る。

「荒川さん・・・」

ほらね。

「放課後、職員室に来なさい。」

はい　と気の抜けた返事をしたあたしをまたにらみつけた。

日が暮れる

私が居眠りの件についてみっちりしぼられたときには、時計はすでに6時を回っていた。

しかし、外の明るさはまったく変わらず　と言うほどでもないが、まだ夕日が顔を出しているぐらいでまだまだ夏の衰えを感じない。夕日の日が差し込む教室に鞆を取りに向かうと其処に人の気配はなかった。

「…やっぱり誰も居ないか…」

そう漏らすと誰かの声がした気がした。

「荒川さん??」

「はい!!!??」

急に声を掛けられ驚いた私の返事は裏返ったものだった。後ろを振り返ると彼女が立っていた。

「こんな時間まで怒られてたの？」

人懐っこい笑顔で笑う彼女が言う。

「うん。まあ仕方ないよね」

「荒川さんはいいなあ。楽観的で」

そういつてクスツと笑った。

「そんなことないけど・・・」

つて言う私。本当は一緒に居れて嬉しいくせに。
自然と私達の足は校門へ向かっていた。

「なんでこんな時間まで残ってたの？」

「え・・・うん。ちょっとね」

彼女は隠し事が下手だと思う。
すぐに視線をそらすから。

「今日は家に帰りたい気分じゃなかったから」

うつ伏せたその瞳が遠くを見つめる。

「うん。そういう日もあるよ」

コンクリートの地面を踏んで私は教室から見た夕焼け空が少しずつ
暗くなっていくのに気づいた。

「こうやって時は流れるんだね」

そう言うと彼女はポカンとした顔でこちらを見つめた。

この僅かな沈黙と彼女の視線に堪えられなくなった私は話をそらそうとした。

「うん・・・そうだね」

思いがけない返事が嬉しかった。

他愛も無い好きな音楽の話とかドラマの話とかテストの結果とかそんな普通の会話がとても大切だよ。

彼女と別れるこの交差点で私は彼女とさよならした。

「じゃあ、また明日ね」

「うん。ばいばい」

そう言ってニコリと笑った彼女の顔は私の知らない顔だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8070a/>

彼女へ送る・澄んだ空・夢のなか

2010年10月15日23時45分発行